

ポワレの挑戦： ドレス・パターンとテキスタイルを手がかりとして

京都服飾文化研究財団チーフ・キュレーター 深井晃子

パターン作成：京都服飾文化研究財団レストアラー 伊藤ゆち子

POIRET'S CHALLENGE: A STUDY OF THE PATTERN AND TEXTILE OF HIS DRESS

Akiko FUKAI, Chief Curator, Kyoto Costume Institute

Paul Poiret's dress of around 1922, housed by Kyoto Costume Institute, is a cylindrical two-piece dress, which was popular in the 1920s. The textile was produced by Bianchini-Ferrier and designed by Raoul Dufy. The white and black pattern combining the leaves of tropical plants and human figures is based on the four woodprints "Dance," created by Dufy in 1910.

This print design has a remarkable feature: a border with plants and human figures positioned to surround the black square at the center. This kind of design looks familiar to us, resembling square scarf designs. Accordingly, it is highly possible that this textile was originally designed for scarves.

Making a dress with textile designed for scarves, not for dresses, may cause numbers of constraints in pattern matching and required length of cloth. Nevertheless Poiret used this textile, maybe because he enjoyed the challenge of working under those constraints.

1. 本稿の目的

ポール・ポワレ Paul Poiret [1903-1944] が 1906 年発表した、コルセットの束縛から女性を解放する直線的なハイ・ウエストのドレスは、20 世紀のファッションの扉を本格的に開くことになった。これに続き、彼はオリエンタリズム、バレエ・リュスなどの影響を捉えて、斬新なキモノ風コート、ホブル・ドレス、ランプ・シェード・スタイルなどを次々に発表し、与えられたあだ名「モードのサルタン」の如く、まさに 20 世紀初めのファッションを先導した。

第 1 次世界大戦後、新たに登場したココ・シャネル、マドレーヌ・ヴィオネら女性デザイナーたちが目覚しく活躍する傍らで、ポワレの戦前の勢いは陰りを見せたものの、彼のファッション・デザイン活動は、1920 年代末まで続いた。

本稿で取り上げるデイ・ドレスは、ポワレの 1922 年頃の作品 (Fig. 1)。既に『Dresstudy』

56号(2009年)の表紙で取上げたものである。この時、解説において指摘しているのは、このドレスに使用されたテキスタイルについての疑問、すなわちスカーフ用のテキスタイルをポワレは敢えてドレス用として使ったのではないか、という点である。本稿では、この仮説についての説明を進めてみたい。

ドレスは、ドレス全体が1枚のボーダー柄の方形スカーフであるかのようにデザインされている。赤い縁取りのなかに黒と白の強いコントラストで大胆に抽象化された植物と人物柄のプリントが配置され、中心部分は小さな正方形が黒地として残されている。プリント・デザインはラウル・デュフィ Raoul Dufy [1877-1953]。ドレスのシルエットは、この時代の流行がよく反映された円筒形で、ブラウスとスカートから成るツーピース・ドレスである。まるで服自体が、というよりもこれを着る身体が、一枚のスカーフに変容したような、独創的なドレスは、そのシュールさにおいて一際瞳目に値するデザインである。

これまでもたびたび展覧会が開催され、近年においても、メトロポリタン美術館(ニューヨーク)の「Poiret: King of Fashion」展(2007年)などがあり、彼についての出版物も多数刊行されているにもかかわらず、ポワレ自身のあまりにも華やかでドラマティックな生き方のためか、流布している多くの言説に比べれば、彼のデザインそのものについては、必ずしも丹念に検証されてきたとはいえない。しかし、ポワレを「コルセットからの解放者」、「モードのサルタン」、あるいは楽天的な「折衷主義者」としたままで、他の重要な面を見逃してしまうのは、彼のファッション・デザインにおける本質性を正當に評価しないことになるのではないかと。KCIは、興味深いポワレ作品を収蔵している。これらのポワレ作品について、ドレスの構成パターンと彼が使っている多様なテキスタイルに注目しながら再調査し、彼のデザインについての特性を検証していきたい。

その手始めとして本稿では、表題のポワレのドレスを取り上げ、極めて独創的なこのドレスのパターンとテキスタイルを精査し、デザインの特質を明らかにする。

2. デュフィのテキスタイルとポワレ

このドレスに使われているのは、デュフィのプリント・デザインである。製作は、ビアンキニ=フェリエ社 Bianchini-Ferrier (1888-1991)。ポワレのデザイン活動において、フォーヴィスムの画家として知られていたラウル・デュフィとの関係は、とりわけ重要な意味を持っていたことについて、簡単に述べておきたい。

ポワレは、ウィーンへの旅の後、ウィーン工房の影響から、1911年にパリに装飾美術工房マルティエヌを立ち上げた。新しい感性に適合するテキスタイルの制作を目指したのである。

フォーヴィスムから、明るい色彩と軽快なリズムによる独自の画風へとその作風を変化させていき、次第に装飾芸術への傾斜を強めていたデュフィは、1910 年ごろ、ポワレと知り合い、ポワレの出資による「プティット・ユジヌ」でテキスタイル・デザインに取り組んでいく。しかし、デュフィはポワレとの仕事から離れる。1912 年から 28 年まで、リヨンの絹織物メーカー、ビアンキニ＝フェリエ社と専属契約を結び、主にグワッシュと水彩によるテキスタイルのデザイン画を描いた。同社は、ポール・イリーブやソニア・ドロローネーらとのコラボレーションによって、数多くの優れたテキスタイルを世に送り出し、オートクチュールや高級プレタポルテに豪華な素材を供給する会社としてその地位を確立し、20 世紀前半、世界的に知られることになるテキスタイル・メーカーである。

ポワレは、デュフィとの協働が終わった後も、ビアンキニ＝フェリエ社によるデュフィのテキスタイルも含め、デュフィのテキスタイルをさまざまな形で服のデザインへと昇華させている。それらは、抽象化したモチーフが大胆な色彩で扱われたテキスタイルに、ポワレによりその大胆さがより強化された、単純で明快なフォルムのコートやドレスである。その作例はかなりの数現存しており、本稿で取り上げるドレスもその一点。

3. ドレスの構成と使用されたテキスタイル

ドレスは、先述したように長袖ブラウスとスカートからなるボートネックのツーピース・ドレス。当時の円筒形シルエットが、ほぼ直線的な裁断線で構成されている。ドレスに使われているテキスタイルは、プリントのシルク・クレープ。白と黒で熱帯植物の葉と人物を組み合わせた柄は、デュフィが 1910 年に制作した 4 点の木版画の中の 1 点、《ダンス》を基本にしている。このプリント・デザインには、明らかな特徴が見られる。それは、中心の黒い正方形を取り囲むように、先述の植物と人物柄が配置されたボーダー柄であること。こうしたデザインは、正方形のスカーフ用のデザインとして見慣れたもの、つまり、このテキスタイルは、ドレスという用途ではなく、スカーフ用としてデザインされた可能性が極めて高い。

この疑問は、スカーフ全体が一つの柄としてデザインされたと思われることによるのだが、それは、たとえば、

- ・スカート裾中央に配されている 3 人の人物を前後の身頃で比較すると、中央の水夫が着用しているパンツの織の描き方が異なっている (Fig. 3-1、3-2) ことから、それが疑われる。
- ・また、ブラウス衿ぐりに配された柄は前後同一のもので、スカートの前裾の柄とも

一致する (Fig. 3-1、3-3)。ブラウス裾の前後の柄とスカート後裾の柄も同様に一致。ブラウスの柄は衿ぐりから裾まで一続きのデザインであることから、上記1 と併せて考えると、スカートの前後の柄はプリントの版によるリピートではなく、同一図案の中の異なる場所——前裾の柄を図案の下部とすれば後裾は上部——から取られたものであると思われる。

- ・前スカートの柄は、裾の両脇線の部分の人物像が正方形の対角線方向に向かって配置され、それを縁取っている白い線は直角になっている箇所がある (Fig. 3-4)。後ろスカートも同様であり、図案全体は正方形となる。

- ・同様にしてブラウスの袖の柄を比較すると、前袖左右とスカート右脇ウエスト、後袖左右とスカート左脇ウエストの柄がそれぞれ同一であった。ただし、右後袖のみは布を反転させて裏側を使用している。

(この理由については、不明である)

以上、これらの観察から、元のデザインを再現したものが Fig. 5-1 である。また、この再現図に、服のパターン (Fig. 2) から柄のある部分を、柄が一致するように配置すると、同柄の生地が最低3 リピート分必要であることがわかる (Fig. 6)。つまり、スカーフが3 枚使われている。

また、このドレスの重要なデザイン・ポイントになっているのは肩から袖山、袖口にかけてと、裾に配置された8cm の赤い縁取り部分である。この縁取り部分は、すべて別パーツとして、縫い合わされている。しかし、Fig. 5 の外輪部分には、先に見たように白い細い線と赤い縁取りが配置されていたことが、縫い代部分 Fig.4 から、明らかになった。その幅については、明確な数値を得ることはできなかった。ただし、恐らくは8 cm 前後の幅であったことは、このドレスの赤い袖口部分が少なくとも8cm 以上であることから、推測される。

以上のことから、ドレスに使われた布の元のデザインは Fig. 5-2 となる。また、元のスカーフ全体のサイズは、おおよそ 100cm×100cm と推測され、このサイズからも、正方形のスカーフとして作成されたものと考えられる。

こうしたデザインのシルク・プリントのスカーフは新しい流行として 1920 年代には受け入れられていたこと、また、デュフィが、ビアンキニ＝フェリエ社でスカーフやハンカチのデザインも手がけており、そのなかにはここに見られるような正方形のボーダー柄によるプリントのスカーフ・デザインも含まれていたことから、スカーフ用生地である可能性が指摘できよう。

いずれにしても、ポワレはデュフィのスカーフ用デザイン、すなわち赤い縁取り部分、黒い中央の正方形などスカーフが持つ独特のデザインの特性を効果的に生かしながら、ドレスに見事に変換させたのである。

4. ポワレのデザイン

ポワレは、スカーフという用途にデザインされた布を使ってドレスを制作した。そのことは、ドレスを制作するにあたっては、ドレスのデザイン上に、柄あわせ、用尺の点から、多くの制約が生じることになる。

しかし、その制約にポワレが敢えて挑んだのは、どのような理由からだったのか。

恐らくは、ポワレは、スカーフという既に明確な用途を持つテキスタイル・デザインを用いることにより、ドレス・デザインが受けることになる制約それ自体への挑戦を試みたのではなかったか。

ポワレは、マルティヌ工房を立ち上げていることから理解されるように、衣服デザインにおけるテキスタイルの重要性を強く認識していたデザイナーである。このドレスではスカーフ用途のテキスタイルが選ばれているが、彼は東欧、中東、インド、ロシア、さらには日本も含めて、世界各地から収集された数多くのテキスタイルを収集しており、それが彼の作品には頻繁に使用されている。KCIの収蔵品にもその類例が存在する。

こうしたテキスタイルは、作品にエキゾチックな雰囲気を与えることになり、折衷主義者と呼ばれるポワレにおいて、デザインの特性として認識される重要な点である。しかし、そればかりではなく彼の異国性への興味は、その根底に、民族的なテキスタイルがしばしば持つ特有の素朴さ、強さ、土着性、斬新さ、新奇性など、西欧の洗練されたテキスタイルには見出すことができなかった新たな美を見たからに違いない。この異国性への興味が、当時のアートの流れとも共振するものであったことはいまでもなく、それは時代の流れを誰よりも良く掴んでいたと自負するポワレであれば、単に個人的興味からの方向性だとはいえず、彼の自負を裏付けるものだといえよう。

いずれにしても、ポワレがその作品に使ったこれらのテキスタイルは必ずしもドレス用のものだったわけではなく、とすれば、それをドレスに向ける場合ドレス・デザインに際して生じる、多くのデザイン上の制約が生じるのは当然であった。ポワレは、その制約を超えて、新たなデザインを生み出そうとしている。

本作品の場合、デュフィによる大胆なスカーフ・デザインをドレスへと転換するための挑戦を試みているのだが、それはこのスカーフ・デザインが、ポワレの挑戦を挑発するに十分、新鮮で興味深い対象だったからに違いない。この挑戦によってポワレが創り出した

のは、まるで服自体が、というよりもこれを着る身体が、一枚のスカーフに変容したような、シュールなドレスだった。このドレスにおいて、ポワレは、与えられた制約を完璧に制御し、結果として極めて興味深い、独自性を持った作品を生み出したのである。